

武庫川女子大学教育研究所／ 子ども発達科学研究センター 2016 年度活動報告

Progress Reports on
Mukogawa Women's University Center for the Study of Child Development 2016

河合 優年* ・ 難波 久美子** ・ 佐々木 恵**
石川 道子* ・ 玉井 日出夫***

KAWAI, Masatoshi, NAMBA, Kumiko, SASAKI, Megumi,
ISHIKAWA, Michiko & TAMAI, Hideo

目次

I. はじめに

II. 2016 年度の子ども発達科学研究センターについて

1. 本年度の取り組みについて
2. 外部資金の獲得について
3. 次年度に向けて

III. 2016 年度活動詳細

1. すくすくコホート三重・武庫川チャイルドスタディ
2. 子どもの育ちと学びを支える専門職の方のための
「子どもの発達」を学ぶ会

IV. 研究業績

* 武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・研究員／文学部心理・福祉学科・教授

** 武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・助手

*** 武庫川女子大学教育研究所（子ども発達科学研究センター）・研究員／客員教授

I. はじめに

武庫川女子大学子ども発達科学研究センター（以下、子どもセンター）は、独立行政法人日本科学技術振興機構（JST）の「脳科学と社会」計画型研究開発「日本における子供の認知・行動発達に影響を与える要因の解明（JCS：Japan Children's Study）」（2009年3月終了）において起動した。その後、その時の協力者を対象として、西宮市と三重県久居市、尾鷲市における追跡研究を、2009年度より日本学術振興会科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（A）「乳幼児期の個体・環境要因が児童期の社会的行動に及ぼす影響についてのコホート研究」（2014年3月終了）、2015年度より同じく科学研究費補助金基盤研究（B）「乳幼児期の個体・環境要因と児童期の社会的行動の生物学的基盤についてのコホート研究」として追跡してきている。これらの研究によって、当初目標としていたアウトカムとしての学齢期後半の社会性指標が開発された。また、これまで蓄積されたデータは順次分析され、国際学会等で発表されている。

これらの研究によって開発された追跡手法および指標を活用して、2015年秋より、文部科学省委託事業「いじめ対策等生徒指導推進事業：脳科学・精神医学・心理学等と学校教育の連携の在り方（通称：子どもみんなプロジェクト）」を受託し、大阪大学など国立8大学とのコンソーシアムの中で、これまでの追跡研究の成果を学校現場に還元するべく、地域連携による事業を開始している。

2016年度は当初の目的であった、乳幼児研の諸変数と学童期における学校での問題行動や社会性との関係解明についてのこれまでの研究成果と、青年期に入ってから追跡という今後の方向性についての検討会を、フリー大学（Vrije Universiteit Amsterdam、オランダ、アムステルダム）のサフェルスバーク教授を招聘して開催し、外部評価を行った。評価結果は子どもセンターのホームページにも公開されているが、高い評価を得ている。課題として、国際的な比較研究に言及されているが、現在進行中の、小中学生の社会的行動とレジリエンシーについてのゴンザガ大学（Gonzaga University、アメリカ、スポケーン）との共同研究が一つの解を与えるものと考えている。

昨年度において報告されたように、心理的指標と生物学的指標に関しても、ようやく遺伝子のメチル化を指標として連結できるところまで来ており、成果が期待できるところまで来ていると言えよう。

上述した、子どもみんなプロジェクトでは、本研究センターのミッションとして西宮市内小中学校の全数調査が計画されているが、タブレットを用いた調査実施のプロトコール開発など、研究成果の社会実装がようやくなされる段階までできているといえよう。基礎研究と教育実践とをどのように接続するのが今後の大きな課題となる中で、子どもみんなプロジェクトの取り組みは一つの在り方を示すものと考えている。研究成果の発信とともに

に、次の10年に向かってどのように研究体制を整えるのかが問われ始めている。

Ⅱ. 2016年度の子ども発達科学研究センターについて

1. 本年度の取り組みについて

2016年度は以下のような研究活動と成果の地域還元および成果発表を行った。

①コホート研究

本研究は、子どもセンターの中心事業として継続しているものである。0歳より追いつけている三重県内の協力者には、今年度は任意の唾液調査を含む郵送での質問票調査を実施した。

また、「武庫川チャイルドスタディ」として、同様の枠組みで西宮市内の約60組の母子を対象とした追跡研究についても順調に研究が進められた。今年度は、教育研究所5階心理学実験室における夏期集中観察と、郵送調査を実施した。詳細は後述する。

これらの一部は、国際心理学会、日本発達心理学会において報告されている。

②西宮市との「乳幼児の追跡調査に関する委託研究契約」に関わるデータ整理と研究

2008年に西宮市と武庫川女子大学との間で「乳幼児の追跡調査に関する委託研究契約」が締結され、研究協力事業が開始された。具体的な事業としては、2008年4月より、郵送による任意の「乳児後期アンケート」が実施され、同年6月より、アンケート結果をもとにしたフォロー事業として「すくすく相談会」が開始された。そして、「10か月児アンケート健康診査及びフォロー事業に関する委託」が2009年度から2012年度までの4年間継続された。この研究は、「西宮市10か月児健康診査（個別健診）」として吸収され、発展的に解消された。

この西宮市の乳児に対する全数調査データ（2008年度から2012年度まで5年分、年間約5,000名）と、同児が「1歳6か月児健康診査」、「3歳児健康診査」を受診した際に実施された任意のアンケート調査によって得られた追跡データ（2008年度「乳児後期アンケート」より3年分）に関して、「乳幼児の追跡調査に関する委託研究契約書」を西宮市と交わし、研究を継続している。今年度は、10か月、1歳6か月、3歳の各時点におけるアンケート結果と、「すくすく相談会」の結果の照合を含めたデータセットのクリーニングが完了した。これらのデータセットに基づき、西宮市に対する報告を完了させるため、集計と報告書作成を行っている。データセットの取り扱いを市と協議したうえで、現在子どもセンターで保管している回答されたアンケート原本の処分方法を決定する。

③小中学校の児童・生徒の学級適応についての追跡研究

この取り組みは、西宮市教育委員会との連携の中で、小学校入学から中学校卒業まで

の9年間の一人ひとりの子どもの追跡可能性を検討しようとするものである。これまで、Q-Uテスト（田上不二夫（監）、河村茂雄（著））を用いて学級適応指標として追跡してきたが、2015年度より、西宮市の独自尺度の開発に取り掛かっている。自己回復力を測定するこの尺度では、仲間関係、充足的な達成動機、競争的な達成動機、運動の有能感、身体的脆弱性、心理的脆弱性、問題焦点型の対処、情動焦点型の対処、実存感、自尊心、集団生活スキルの要素を測定し、これまで蓄積してきたQ-Uテストのデータを外的指標として、妥当性と信頼性の検討を始めている。2016年度は、2年目の追跡調査を行った。

本研究は、ゴンザガ大学と共同で進めており、2016年に愛媛大学で開催された日米教員養成協議会（JUSTEC2016）において結果が報告されている。この時に来日した、ゴンザガ大学の 트레이ナー 准教授との検討会が子どもセンターで実施され、米国との比較について今後の研究方法が絞り込まれた。現在のところは日本のデータを中心として、学級内の居心地感の安定性を検討している。規範意識などについて国際比較は、寺井講師（短期大学部共通教育科）と共同で進めることとなっている。

④子どもみんなプロジェクト

2015年度より開始された、大阪大学を基幹大学とした、弘前大学、千葉大学、浜松医科大学、金沢大学、福井大学、鳥取大学、兵庫教育大学、武庫川女子大学の9大学コンソーシアム研究は、2年目を迎え、具体的な調査項目の検討などが進められている。昨年同様に、東京と大阪でシンポジウムが開催された。青森県と静岡県での取り組みが先行しているが、子どもセンターでは、上述の学級適応の研究を進めている。本年度は、教育研究所補正予算により、タブレットによる測定を可能とするアプリケーションの開発を行った。2017年度は、これを使つての実証的な研究に取り掛かる。

⑤教育への還元

子どもセンターの設置目的の一つである、研究成果の学内学生への教育的提示については、昨年同様に学部生の研究会活動などの活動、大学院生を含めた外国人研究者との研究交流などを通じて、研究への動機づけを行った。また、12月に開催された教育心理学会の年次公開講座において、河合が指定討論者として発達障害との関係から追跡の重要性を述べた。本公開講座には、本学大学院生、教員が多数参加した。

⑥地域への還元

2016年度も、専門職者に対しての年間8回の勉強会を継続した。内容は後述する。

2. 外部資金の獲得について

2016年度競争的資金は文部科学省科研費（B）と文部科学省委託事業「いじめ対策等生徒指導推進事業：脳科学・精神医学・心理学等と学校教育の連携の在り方」に関する研

究の、2つの補助金を獲得している。

3. 次年度に向けて

2017年は、文部科学省科研費（B）の最終年度にあたる。そのため、これまでの研究結果の整理と分析が中心となる。また、これまでのコホート研究で得られた膨大なデータと接続し、共同利用できる形に整理していく。現在子どもセンターにはさまざまな資料や機器が保管されている。これらについては、整理し、処分できるものの仕分けを行う。

各研究テーマの具体的な計画は以下の通りである。

①コホート研究

データセットの完成と論文化を進める。紙媒体データ・電子データの整理を実施し、国内の共有データ資料として広く国内外へ公開する準備に入る。同時に、これまでに得られたデータをまとめる作業に入る。追跡調査も引き続き実施する。

②西宮市における乳幼児の追跡調査

データセットの扱いを協議する。2017年度は、原則として西宮市との契約は行わない。また、この枠組みでの調査協力者の追跡は断念する。

③児童生徒の学校適応

西宮市教育委員会との連携研究として進められてきた本研究は、④の子どもみんなプロジェクトとして、国のプログラムの一部となってきた。同時に、国際研究として、ゴンザガ大学との共同研究として、国際比較の日本の基本データとしても位置付けられるようになってきている。追跡開始から5年目となり、学級適応と子どものレジリエンスとの関係説明が可能となってきた。また、この成果と、他のコンソーシアム大学の成果を踏まえた、保護者講演会の開催を計画している。

④子どもみんなプロジェクト

2015年から始まった本プロジェクトは、3年目となり、各大学での取り組みを完成させる段階にきている。プロジェクトには中京大学と大府市教育委員会が新たに加わり、10大学となっている。これまで武庫川女子大学が果たしていた、事務局機能と研究データの管理は、大阪大学に移行する。本学は西宮市での子ども一人ひとりについての追跡可能性についての検討を集中的に検討していく。

⑤学院教育への還元および地域連携

また、地域連携に関しては、前年度と同様に石川、河合の両名が西宮市の諸施設と連携を保ちながら、小中学校の研究指導、実践指導を含めたさまざまな形でのアドバイス活動に参画していく。また、現場教員への還元として、10年研修に両名が講師として参加する。

Ⅲ. 2016 年度活動詳細

1. すくすくコホート三重・武庫川チャイルドスタディ

(1) 2016 年度の進捗

すくすくコホート三重では、小学校 5 年生、6 年生の協力者に、3 学期に郵送調査を実施した。5 年生には任意で唾液調査（DNA メチル化測定）への協力を、質問票送付と同時に依頼した。

武庫川チャイルドスタディでは、夏休みに小学 3 年生の唾液調査（アミラーゼ、コルチゾールの測定（任意））を含む観察調査を実施した。また、3 学期には、小学校 4 年生の郵送調査を実施した。今年度も個別の発達相談にその都度対応している。

武庫川チャイルドスタディにおける唾液調査は 2 回目となるが、前回の反省点を踏まえ、手続きの見直しを行った。その結果、より簡便な方法で実施することができ、協力者全員の参加と測定可能な標本の回収につなげることができた。また、個別の結果発送も実施した。

すくすくコホート三重と武庫川チャイルドスタディの協力者向けのニューズレターは、順調に発刊できた。学齢期の子どもを持つ保護者の方々に多くの情報を提供できたのではないかと考えている。

(2) 今後の予定

2017 年度は、前述の通り引き続きデータ整理とその論文化を中心に行う。また、追跡調査については、すくすくコホート三重では、小学校 6 年生、中学校 1 年生（春）の協力者に郵送調査を行う予定である。武庫川チャイルドスタディでは、小学校 4 年生の夏の観察（唾液調査（任意）を含む）と、小学校 5 年生の郵送調査とが実施される予定である。

2. 子どもの育ちと学びを支える専門職の方のための「子どもの発達」を学ぶ会

(1) 2016 年度の取り組み

子どもセンターの設立当初の大きな目的は、学童期における社会性の形成過程解明であった。これは、JST 研究において、ASD（自閉スペクトラム症）の多くに、他者の意図を理解したり、コミュニケーションをとることが難しいという、社会性の問題解明が中核におかれていたことと関係している。子どもセンターでは、これまで子どもの発達過程に関する基礎的な知識、子どもの神経学的な観察法など、子ども理解や研究を進める上で重要と思われる事柄について学習会をもってきた。

2015 年度は、保育場面における子どもの行動に基づき、子どもたちの運動・認知面の評価の基礎となる測定方法についてアイデアを出し、チェックリストを作成す

る試みを開始した。そして後半は、小学校現場で、どのようなことが問題になっているのか、その問題と考案されたチェックリストはリンクさせることができるかどうか検討した。どのような質問やどのような状況を作れば、子どもの状態を推測できるのか、ということも併せて考えた。

(2) 実施記録

学ぶ会は、武庫川女子大学学術交流館 1 階会議室を利用して、おおむね月 1 回、土曜日に開催された。講演・検討時間は、10:00～11:30 である。開催日時と実施内容を表に示した。

表 子どもの育ちと学びを支える専門職の方のための「子どもの発達」を学ぶ会 2016
開催報告

回	日 程	テーマ	タイトル	担当者	参加者数	院生参加
1	5 月 7 日	行動のチェックリストを作成する	小学校に繋げていく支援	河合優年、石川道子	21 名	0 名
2	6 月 11 日	行動のチェックリストの内容を検討する①	児童期の日常生活にある困りごと	石川道子	17 名	1 名
3	7 月 2 日	行動のチェックリストの内容を検討する②	困りごとを整理する	石川道子	18 名	1 名
4	8 月 6 日	行動のチェックリストの内容を検討する③	チェックリスト化	石川道子	19 名	0 名
5	9 月 3 日	小中学校での取り組みを知る①	N 市での取り組み① 学校現場から	石川道子、植木友加里 藤本翔子	24 名	0 名
6	10 月 1 日	現場からの話を振り返って考える	児童期での問題の再検討	石川道子	15 名	0 名
7	12 月 10 日	小中学校での取り組みを知る②	N 市での取り組み② 学校現場から	石川道子、瀧北佳奈 中島千晴	22 名	3 名
8	3 月 4 日	まとめと展望	チェックリスト完成に向けて	石川道子、河合優年	21 名	3 名

(3) 実施内容のまとめ

今年度は、幼児期後半を対象にした。児童期の問題点を整理し、チェックリストの作成を行った。児童期の集団生活における一つの重要な目標として、就学準備がある。とはいうものの、これまでの話題から、学ぶ会の参加者は乳幼児に関わる専門職者が中心であり、小学校で現在何が起きているのかを詳細には知らない。そこで、このチェックリストが、就学という大きな環境変化を経た小学校生活で、ど

のような意味を持ってくるのか検討するために、小学校での様子を紹介してもらった。講師には、支援のために小学校に入っている、教員とは異なる立場の方々を迎えた。当日は、事例を含めた内容であったが、本報告では、個人情報に触れる部分もあるので、特に子どもに関する報告の詳細は記載していない。チェックリスト作成についても、各回のまとめとせず、いくつかの議論のまとまりで掲載している。

a) 小学校に繋げていく支援

—小学校入学後の問題を見据えて児童期・幼児期に何ができるか考える—

i) 取り組みの目的

これまで具体的なケースを検討しながら、子どもの発達とその評価の視点について考えてきた。システムとしての発達過程の理解では、ある月齢で子どもの行動が実行されるための、下位の要素の存在確認と、それらの機能の協応関係の確認が重要である。過去の検討では、これらの要素間の関係性と同時に、機能出現の順序性にも注意が必要であることを指摘してきた。

例えば、ハイハイすることなく歩行に移る子どもは、歩行という目的を達成しているという意味では、発達評価では“+”になるが、ハイハイにおける四肢の筋肉の協応はスキップされていることになる。現時点ではこのような、前段階の行動のスキップが後の発達にどのような影響を及ぼすのかについては明確な研究結果が得られているわけではないが、機能が相互にカップリングするためには、それらを総合的に使う機会が重要になる。

今年度は、昨年度に引き続いて、子どもの発達をどのように捉え、どのようにその先の発達と結びつけるのかについて考えていく。

ii) これまでの復習

発達検査などで示されている発達過程の記述は、さまざまな状況や背景にある他の行動との関係が捨象されていて、自分が経験している実際の姿とかなり異なる場合がある。生きた子どもの生活の中で子どもを理解することは、実践的意味からも重要である。発達検査のような、ある行動ができた、できていないという0/1データでは扱われない、不器用さなどの視点を加えることにより、認知発達との関係性が議論できるようになる。

これまでの議論の中で、次のような子どもについて保育者は気になるということが分かってきた。①年齢相当でない行動がある（遅い場合も早い場合も）、②他の子どもに対しては有効である手段がその子どもには効果を持たない、③行動が予想できない。

幼児を理解しようとする、彼らの個々の機構系とそれらが相互に関係しあった全体をとらえなければならない。機能の発達は、人間の行動をシステム（組織体）

として見ると、下位要素が相互に関係しながら上位の機能系を形成していく過程であると考えられる。この過程において重要なのが、システムの再構築過程である。例えば、座っていた子どもがどこか別の場所に移動しようとする、それまでの安定していた座位から、腰を浮かすために身体のバランスをいったん崩して立ち上がり、歩行運動に移らなければならない。この別の運動に組み直す時が不安定な時になる。つまり、何か動きを変えようとするときには、いったんシステムを壊して、運動のなかでそれらを再構成する必要がある。子どもは、環境に適應しながら発達する。発達の気になる子どもは、その過程で認知的にも運動的にも、自分の部品を組み直しにくいのかかもしれない。

機能別発達のところでは運動を強調していたが、それ以外の機能についても同じような再構成の瞬間がある。ここでは、知覚を例にとりながら、外の世界に自分を合わせるといことがどのような意味を持っているのか考える。

子どもが外界と相互作用をするためには、見ている知覚世界の特定の対象に注意を固定しなくてはならない。その対象を、空間的にも時間的にも相対的にとらえなければならないからである。画像を固定して、そこから対象をとらえ、その対象に向かって手を伸ばす場合を考えてみよう。知覚の中で、対象を切り出し、そこに向かって手を伸ばす。知覚と運動をカップリング（協応）させねばならないので難しい作業である。対象が動いているとその操作はもっと難しくなる。なにげなく見える、視線の共有や母親とのアイコンタクトも同じような仕組みによっている。視覚と運動のカップリングは、多くの場合経験によって漸進的に作られる。興味深いことに、このような相互関係性が対象との関係性を作り出し、最終的には社会的な存在としての人間が得意とする、社会的関係性にも影響してくることになる。このような、外部にある対象の意味づけを総称して認知と呼ぶ。繰り返し経験することによって、対象が持つ場面に応じた意味を知っていく。

さて、子どもの世界を作り出すものはなにかを考えると、古典的な刺激と反応の連鎖による経験の強さ（強化）だけでは説明できない。外の刺激を取り込む機能や、手伸ばしなどの実行機能は最初から存在していて、それらが外部のどの刺激と関係するのかを記憶の中にしまい込むという、先天的な機能系があるということしか分からない。しかしこれまで見てきたように、手を伸ばすためには、外の世界を取り込んで位置情報を分析し、そこにどれくらいのスピードで手を伸ばせばよいのかを判断し、それらを組み合わせなければならない。どちらかがうまく働かないと、手を伸ばして物をつかむことができない。これこそが協調運動の中核的な部分である。

運動について考えてみても、個々の運動とそれら運動の協調性からなる協調運

動、連動運動、不随意運動などの相互関連性など、とても複雑で階層的な仕組みがある。神経学的に言うと、自動的な運動は小脳系に由来するものであり、本来ユニット化しているので、そこに最初からあると言えばそうだが、ではそれに意味のある活動をさせるのは何かということになる。やる気などは文脈に依存するので、子どもたちの運動は、きわめて高度な仕組みだとしか言えない。

とは言うものの、運動能力が知的な働きと関係していると連想させる素地はある。外界が出している様々な信号を瞬時に分析して最適な運動をしていると考えると、不器用な人は利発でないと見えてしまう。もちろん多くの場合、私たちは自動的に外部がアフォードしている信号（利用可能信号とでもいえるもの）を受け取り最適な行動を選択している。子どもたちはマグカップのどこがつかめそうなのかを検出している。この検出機能は生得的であるようで、特別教えられなくても子どもは手を出してカップをつかむ。このような内的な機能を想定しながら、それらの組み合わせで子どもの発達を考えることによって、私たちは、子どもの発達を理解するだけでなく、有効な支援策を考えることができる。

このように、運動と認知機能は密接な関係を持っているといえる。行動は場面と独立ではない。昨年見てきた運動能力テストの中では、個々の運動はできるのに、課題解決的な場面ではそれが有効に使えないようなケースが見られた。例えば、立幅跳び場面では、どのような恰好で課題を遂行するのかという運動の形とともに、到達点を想定して、その目標にむかって飛び出すという動作を計画し、そのために上肢と下肢を協調させ、タイミングよく飛び出すという、各要素のカップリングが必要になる。しかし、その場足踏み的な運動に終わる子どもたちが何人か見られた。

幼児の動作が稚拙であり、年齢よりも遅れてみえる場合や、著しく早い場合に、私たちは何か気になると感じる。運動能力テストでは個々の運動能力が測定されるが、実際の生活場面ではそれらを組み合わせて、目的を遂行するために使うことになる。これまで述べてきたように、この場面だとうろくするとよい、というような認知的な分析が重要となる。これは、保育場面では個人差として理解される。仲介因子や、やる気を高めるエンハンサー（働きや気持ちを高める強化要因）などの心理的な働きも重要である。

iii) 今年度勉強会の計画

昨年検討した運動能力テストは、どちらかというと身体の特定位点を使った活動である。したがって日常活動の中で使われる場合には、目的を達成しようとする意欲や動機づけなどの要素と、筋肉活動を適切に変形させるような知恵が必要となる。この2つの場面での筋の使い方は、筋電図的には同じかもしれないが、組み合わせは全く異なるものになる。

そのため、子どもを理解するには、個々の運動能力や認知能力だけでなく、どのような場面でそれらが使われるのかを含めた目利きが重要になる。子どもの運動がどのような場面でどのように使われているのか、そこで期待される行動を形成している要素は何か、次の発達段階でどのような要素が組み合わされるのか、そのきっかけは何か、などの視点が必要となる。この「場面」を「ニッチ」と呼ぶ（例：魚にとってのニッチは水。水が無ければ生きて行けない）。場面が適切でないと子どもの本当の力が見えないかもしれない。今年度は、場面での行動とその意味について考えていく。

b) チェックリストの作成

参加者に、主に3歳より後の日常生活の困りごとについて挙げてもらった。出された困りごとは、①言語主張のコントロール不可（他者が話している時にもどんどん話してしまう、割り込んでしまう、など）、②言語による情動コントロール不可（思いが通らなると泣く、怒ると手が出る、など）、③注意を向けられない（遊びに熱中していると耳に入らない、自分でこうと決めると聞けない、など）、④複雑な会話内容の理解不可（話全体を理解できない、自分のこととして理解できない、など）、⑤パニック（トラブルがあると、関わりを拒絶する、など）、⑥ルール学習／適用（生活の流れが抜ける、など）、⑦身体コントロール（寝起きの悪さ、排尿場所、不器用さ、など）、⑧環境への不安・慣れ（初めてのものへの慣れの悪さ、など）、⑨年齢／場面相応の遊び方（遊びが幼い、家庭の様子が筒抜け、など）、といった内容に分類された。

これらの行動は、年齢が低ければ問題にならないような行動、年齢にふさわしくない行動が多く含まれていた。また、個別の事例の特殊な行動もあった。何が問題となるのか検討していくために、さらに、問題行動が目立ちやすい場面、例えば外での自由遊びの場面では、どのような問題が起こりがちか検討した。

保育園での遊びの場面は、大きく＜設定遊び＞と＜自由遊び＞がある。＜設定遊び＞では、できないこと、経験していないことを発見することができる。しかし、全員で同じことに取り組むようなやり方は、西宮の公立保育所では行っていないため、今回は検討対象としない。＜自由遊び＞の中でも、自由度の高い外遊びを対象にする。どのような気になる行動があるか、見かける場所はどこか挙げてもらった。

まず場所は、本来遊びで使わない（使ってはいけない）場所、例えば、植え込み、池の周り、玄関（運出の職員などに関わろうとする）、ドア周り、日陰（すぐに疲れる）、水周り（1、2歳くらいではいる。3歳くらいになると切り替えられる。しかし小学校では、やめられない子が再び見られる）などが挙げられた。遊びの種類であるが、いつも同じ遊びをしている、ということも特徴である。砂場、滑り

台、三輪車などが挙げられた。

また、友だちとトラブルが起こる、というのは加配のポイントになるため、先生方に認識されやすい。何でもトラブルになるという場合もあるし、(自分のものだと思っている)遊び道具の取り合いでトラブルになる、特定の子とトラブルになる、ルールが分からないためにトラブルになる、などが挙げられた。

困るポイントとしては、何度言っても繰り返す、先生(大人の介入)に対して、なぐる、ける、かむ、言葉の使い方を間違えている、伝わらない、といった点である。大人の介入への反応として、説明が分からない(言語レベルの問題)ために、同じことを繰り返す、ということがある。また3歳児だと聞けないが4歳児になると聞ける。抽象的な説明は特に理解が難しい。どのようにふるまうか、という言葉の説明は、身体行動と一体化させるとわかることもある。他に、そもそもコミュニケーションの認識の欠如(何か言われるんじゃないかという認識がない、やってもいいかな(ルールの確認)、ということを大人に確認する必要性を感じていない、大人は邪魔する人、の認識)についても注意が必要だろう。

これらを踏まえると、子どもの言語発達を丁寧に援助しながら、その場にはルールがあり、他の子どもはそのルールに従っていて、最終的には、そのルールを管理する大人がいる、ということを理解させる働きかけが必要だろう。しかしこれを一度に援助するのは難しい。どのような言語発達レベルならば、どのようなルール理解が可能か、という段階の設定が必要かもしれない。

以上は、自由度の高い場面から出てきた。自由度の低い場面(することが決まっている、生活場面など)ではどうなるだろうか。

c) 小学校の現状

講師を招き、N市での取り組みを紹介していただいた。

①インクルーシブ支援として教育資源の連携と指導支援の質の向上にかかる調査研究を目的にスクールクラスターモデル事業を開設した。N市では、発達障害児に関する取り組みとして、小学校と中学校に派遣された。活動内容は介入をして何かをするのではなく観察を通して気づいたことを現場へフィードバックする手法を取った。活動の結果、管理職と現場の先生の情報共有を促すことができた。この支援方法の問題点として、先生方は即効性や解決策を求めてくることが多い。観察記録については、どのように現場で活用されているのかわからないといったことが挙げられた。現在いろんな立場の支援者が学校現場に入ってきている。連携できればいいが、まだ手探りで行われているところもある。

②教育相談員として巡回相談をしている。一人が10校を担当し、巡回している。

学校の中へ入って行って観察していると、規律が守られていない学校も多くある。発達障害の特性を持っている子どもに対する対応がよくないケースが多い。なぜその子はパニックを起こしているのか、その子は何に困っているのか、という視点が無い。他の支援体制とやり取りがないようなケースもある。

- ③支援センター、アウトリーチを実施している。保育園から高等学校まで、教室観察して教員にフィードバックする。1、2時間限定の観察をした後に、教員に報告の時間を取る。教員による子どもに対する見立てがよくない。子ども自身の姿が捉えられていない

d) チェックリストの再検討とまとめ

児の問題行動がどのような幼児期・児童期を経て形成されてきたのかを考え、これまで前半で進めてきた行動のチェックリストとの関連性を探り、幼児期・児童期の段階でどのように支援していけばよいか検討した。

まず個々の問題として、発達性協調運動障害（DCD : Developmental coordination disorder）のような、自分の身体の感覚が不確かであるということは、外界の環境認知も不確かなものになる可能性がある。その児の状態の評価ということが必要である。しかし、これまでの発達検査のように、各機能別にできる・できないを捉えるだけでは不十分である。それぞれの機能を組み合わせて快適に生活しようとするのできなくなる、というような状態を評価していきたい。今、作ろうとしているこのチェックリストは、「生態学的発達検査」というものになるのではないかな。

生態学的、ということで、場面の切り取りが大事になってくる。違いが出やすい具体的な場面を設定する必要がある。困りごと、あるいは小学校のトラブルから場面を設定していくのがよいのではないかな。これまで検討してきた、発達障害の視点（運動面での特徴・対人関係での特徴・こだわりなどの心理的な特徴）に今回の学習場面での特徴を加えて多層的に捉えることにより、問題行動の生起メカニズムを捉えていけるのではないかな。

「生態学的発達検査」

以下に示す行動が見られるか。 <よく見られる・ときどき・見られない>

学校生活領域

- ①指示が入らない
- ②学習課題ができない
- ③学校での活動は指示すればできる
- ④着席が続かない
- ⑤ちょっとした刺激でパニックになってしまう
- ⑥友達とトラブルが多い
- ⑦学校へ来られない
- ⑧集団行動を中断させてしまう

学習

- 文字数字に興味がない → 書けない
本を読まない
名前が分からない
時計・カレンダーの意味が分からない
曜日がわからない
- まわりの真似をすることがわかっていない
- 分からないことを先生に聞いてこない
- 集団でそろって動くときに別の動きになる
(運動会での練習 音楽発表会の練習 お遊戯の練習)
- 合わせてゆこうとするより自分でやって行こうとする
- クラスでやっている子もいればやっていない子もいるとなると難しくなる
- 誤った自分への注意の向け方方略をとる (先生が注意のためこちらに来る)

環境

- 連携機関などの情報があるか
- 相談の枠組みがあるか
- 先生がカウンセリングについての知識をもっているか
- 危機対応の方法が明示されているか
- 授業規律があるか
授業が始まらない 終わらない 始業終了の挨拶
子どもがうろうろしている 授業中にトイレに行く
- 先生が発達障害や不登校を理解しているか

○原因ではなく行動を抑制しているか

先生の個人差

○障害名に過剰に反応するか

○先生の困り感

○生徒のパニックに対応できているか

○一人ひとりの支援と、学級・学校全体での問題の取り扱いは別か

○管理職がアウトリーチを知っている

(4) 次年度に向けて

今年度は、行動のチェックリストを作成する、ということを中心に進めてきた。また、その場の困ったことの評価だけに終わるのではなく、小学校就学後の適応に役立つようにしたいと、小学校の現状を知る回を設けた。次年度は、具体化とともに、実際に使えるものになるかどうか、実践的に取り組んでいきたい。

Ⅳ. 研究業績

(1) 書籍

- 1) 難波久美子・河合優年 2016 マイクロアナリシス (VI 部 75 章 1 節) 田島信元・岩立志津夫・長崎勤 (編) 新・発達心理学ハンドブック 福村出版.

(2) 論文

- 1) 河合優年・難波久美子・佐々木恵・石川道子・玉井日出夫 2016 武庫川女子大学教育研究所／子ども発達科学研究センター 2015 年度活動報告 武庫川女子大学教育研究所研究レポート, 46, 103-123.

(3) 学会発表

- 1) 河合優年・難波久美子・佐々木恵・小花和 W. 尚子・山本初実・田中滋己・玉井航太 (2017). システムズアプローチからみた発達過程 (2) KIDS (乳幼児発達検査) 5 領域の交差遅延モデル分析からの検討. 日本発達心理学会第 28 回大会論文集 P.432. (広島大学, 3 月)
- 2) Namba, K., Kawai, M., Sasaki, M., Tanaka, S. & Yamamoto, H. (2016) The effect of self-regulation behaviors at 3.5, 5, and 6years old on temperaments at their school age. Poster presented at International Congress of Psychology 2016. (July, 2016. Yokohama, Japan).

- 3) 難波久美子・河合優年・佐々木恵・山川紀子・山本初実 (2016) . 幼児期における行動抑制の発達的变化 (6) 5 歳、6 歳の実験室場面における抑制行動と熟慮性—衝動性との関連 . 日本発達心理学会第 27 回大会論文集 P.539. (北海道大学, 5 月)
- 4) Tanaka, S., Yamakawa,N., Tamai, K., Namba, K., Sasaki, M., Obanawa, N. W., Kawai, M., Yamamoto, H.. (2016). The maternal affect toward infants during the puerperal period might be correlated with the biomarkers in cord blood. Poster presented at International Congress of Psychology 2016. (July, 2016. Yokohama, Japan) .
- 5) 田中滋己・アウンコーウー・盆野元紀・山本初実・井戸正流・河合優年 (2016) 母体の心理的要因と臍帯血中のバイオマーカーとの関連 . 第 70 回国立病院総合医学会 . P2-41-7. (那覇市, 11 月)
- 6) Terai, T., Takai, H., Alfonso, C. V., Traynor, J., Sunderland, J., Kawai, M. (2016) Short-term Longitudinal Study in Japanese Elementary and Junior High Schools Regarding School Adaptation. -Is There Any Sign before Being Maladjusted?- JUSTEC (日米教員養成協議会) 28 回大会 . Proceedings and Abstracts,P41. (愛媛大学, 11 月)

(4) 発刊予定

- 1) 河合優年・高井弘弥・寺井朋子・佐々木恵・坂田智美・大和一哉・谷口麻衣・星川雅俊・加莉頼子・河合純孝 (印刷中) 児童生徒の心理的状态把握とその追跡の方法に関する研究－ 9 大学連携共同研究「子どもみんなプロジェクト」の西宮市における取り組み－ The Study Regarding Procedures to Comprehend and Track Physiological Conditions of Pupils : Efforts in Nishinomiya for the Collaborative Research “Kodomo Minna Project” by Nine Universities.